

研究・調査報告書

分類番号	報告書番号	担当
C-142	24-313	慶應義塾大学名誉教授 加藤眞三
題名 (原題/訳)		
The effectiveness of reduction in alcohol consumption achieved by the provision of non-alcoholic beverages associates with Alcohol Use Disorders Identification Test scores: a secondary analysis of a randomized controlled trial アルコール使用障害識別テスト (AUDIT) スコアに関連する非アルコール飲料の提供による飲酒量削減の有効性：無作為化比較試験の二次分析		
執筆者		
Shohei Dobashi ^{1,2} , Kyoko Kawaida ² , Go Saito ² , Yukiko Owaki ² , Hisashi Yoshimoto ^{3,4}		
掲載誌		
BMC Med. 2024 Sep 30;22(1):424. doi: 10.1186		
キーワード	PMID	
アルコール使用障害識別テスト (AUDIT)、ノンアルコール飲料、アルコール摂取量	39343906	
要 旨		
<p>背景：アルコール使用障害識別テスト (AUDIT) は、臨床現場でアルコール関連問題の重症度を評価するために広く用いられており、アルコール削減介入の効果はこの重症度スペクトルによって異なる。最近の研究では、無料のノンアルコール飲料の提供を伴う 12 週間の介入が、介入後最大 8 週間、多量飲酒者のアルコール消費量を減少させることを実証した。しかし、この効果が異なる AUDIT スコア範囲で一貫しているかは不明であった。したがって、本二次解析では、AUDIT スコアが示すアルコール関連問題の重症度が、アルコール摂取量削減におけるノンアルコール飲料提供の効果に影響を与えるかどうかを検討することを目的とした。</p> <p>方法：単一施設、非盲検、無作為化、並行群間比較試験。対象は、大量のアルコールを頻繁に摂取する (男性は 1 日 40g 以上、女性は 1 日 20g 以上) が、アルコール依存症と診断されていない日本人であった。参加者は介入群または対照群に無作為に割り付けられた。介入群は 12 週間の期間中、4 週間ごとに無償のノンアルコール飲料を提供された (350mL ボトル 24 本入りケース、1 回あたり最大 3 ケース、計 3 回)。過去 4 週間のアルコールおよびノンアルコール飲料摂取量は飲酒日記で追跡した。本二次解析では、参加者を AUDIT スコアに基づき 4 群に分類 (群 1 : 7 点以下、群 2 : 8-11 点、群 3 : 12-14 点、群 4 : 15 点以上) し、介入群・対照群双方においてアルコール摂取量の変化を群間で比較した。</p> <p>結果：非アルコール飲料の提供は、全グループで非アルコール飲料摂取量を有意に増加させた。しかし、アルコール摂取量の減少が対照群と比較して有意に認められたのは介入群のグループ 1~3 のみであった。グループ 3 および 4 におけるアルコール摂取量の減少は、グループ 1 と比較して顕著ではなかった (いずれも $p < 0.05$)。重要な点として、非アルコール飲料の提供は、AUDIT スコアが高い個人においても、アルコール消費量の増加を招かなかった。</p> <p>結論：これらの知見は、AUDIT スコアが高い個人では、12 週間のノンアルコール飲料介入による飲酒量減少効果の恩恵が限定的となる可能性を示唆している。しかしながら、この介入は、アルコール依存症のない多量飲酒者における飲酒量減少のための安全かつ効果的な戦略と考えられる。</p>		